

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 森 佳子

論 文 題 目

The clinical relevance of plasma CD147/basigin in biopsy-proven  
kidney diseases

(腎疾患における血漿 CD147/basigin の臨床的有用性)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主査 委員

菅波 孝祥



名古屋大学教授

委員

岡島 徹也



名古屋大学教授

委員

室原 豊明



名古屋大学教授

指導教授

丸山 彰一



別紙 1-2

## 論文審査の結果の要旨

今回、慢性腎臓病（CKD）に進行し得る症例の腎病理組織標本・血液・尿検体を用いて、血漿及び尿 CD147 値は既存の腎障害パラメーターと相関すること、また腎疾患による相違を認めることを示した。組織学的検討の結果、CD147 発現は組織浸潤炎症細胞や炎症を呈した部位に腎疾患に関わらず共通して認められ、IgA 腎症（IgAN）症例においては国際的な組織学的重症度と血漿及び尿 CD147 が相関することを示した。この結果血漿および尿 CD147 値は慢性腎臓疾患の活動性を反映し、治療選択及び治療効果の指標となる可能性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 血漿 CD147 は循環血液中の炎症細胞上に存在する CD147 の細胞外ドメインが細胞外マトリックスメタロプロテナーゼにより切断・遊離し、血漿値として検出していると推測する。尿 CD147 値の一部は循環血液中 CD147 が糸球体から濾過されたものと推測されるが、大部分は尿細管上皮細胞からの逸脱に起因すると考える。

2. CD147 測定値で腎疾患を確定するものではなく、腎生検を代替することはできないが、腎生検と異なり非侵襲的に繰り返しの測定が可能という利点がある。更に、局所的評価である腎生検組織のばらつきを超えて腎全体、また個体内全体の評価を行うことができるという利点もある。末期腎不全進行の予測因子である尿細管萎縮/間質線維化と相関を示すことから、積極的な治療介入を行うかどうかの判断の一助となる。腎生検困難症例のみならず、腎生検施行症例においてもフォローアップの指標となり得る。

3. 糖尿病性腎症（DKD）は現代社会において末期腎不全に至る重要な腎疾患である。DKD 進展メカニズムには慢性炎症や尿蛋白など多様な要素が複合的に関与しており、適切な DKD 治療が行われた症例では血漿 CD147 値の改善が認められていることから、DKD において CD147 は治療効果判定を含めた臨床指標となる可能性がある。

本研究は慢性腎臓疾患において CD147/basigin を臨床応用する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	森佳子
試験担当者	主査	菅波孝祥	沼島徹也	室原豊明

指導教授

丸山彰一

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 測定されたCD147/basiginの由来について
2. CD147/basiginの診断における有用性について
3. CD147/basiginの臨床応用の展望について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腎臓内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員会議の上、合格と判断した。